

## 令和1年度 第3回岐阜市立図書館協議会議事概要

開催日時：令和2年2月13日（木）午後13時30分～15時30分

開催場所：ぎふメディアコスモス 第一会議室

出席者：アンドリュー・デュアー委員長、天野治子委員、石田晴美委員、  
蒲勇介委員、武山康弘委員、中井孝幸委員、中村正信委員、林恵哲委員、  
前田利之委員、山田智直委員、米原木ノ実委員  
(事務局) 吉成館長、川合副館長、中村係長、長尾係長、岸田係長、白崎係長、稲川係長、  
今尾副主査

傍聴人：なし

議事概要：

### ■報告や事務局提案に対する委員からの意見

<b>1 2019年度岐阜市立中央図書館事業実績報告</b>
<ul style="list-style-type: none"><li>・図書館交流事業として杭州図書館が来岐した際には中国の図書館についての講演などがあると司書や市民のためになるのではないかと。</li></ul>
<b>2 岐阜市立図書館目標と評価指針</b>
<ul style="list-style-type: none"><li>・「持続的な文化資本の蓄積」とはどのようなことか。 →本からの知識だけではなく人と人との有機的な関係性を深めていくことを文化資本の蓄積と考えている（事務局）</li><li>・目標の中に読書のバリアフリー化の推進についても入れてもらいたい。</li><li>・ビジネス支援として、図書館を介して中心市街地などの既存のコミュニティを、新しいビジネスを始めたい人につなげていくような支援ができるといい。</li><li>・図書館周辺をどのようなエリアにしていくのかという方向性を定めてビジネス支援をしていくことも今後の課題となるのではないかと。</li><li>・起業しようと思っている人がまずやるべきことを提示し、自信を持たせることが図書館のビジネス支援でできることだと思う。</li><li>・司書とカウンター越しに触れ合うことが少ない。市民と司書がお互いにコミュニケーションをとるようにしたほうがいい。サービスの向上だけでなく地域のニーズの把握に資することができる。</li><li>・分館や図書室にも嘱託職員だけではなく正規の職員を置くことで地域との関係性に継続性が出てくるし独自の企画なども出てくるのではないかと。</li><li>・岐阜市全域を中央図書館でカバーしようと思うのは無理がある。分館、各図書室や学校図書館、その他市内の施設とうまく連携してサービス提供してもらいたい。</li><li>・図書館ブランディングについて、岐阜市立図書館独自の活動の積み重ねが図書館のブランドにつながっていくのではないかと。</li><li>・司書がユーザーのように自分の好きなものを出していけるプロジェクトがあるといい。</li><li>・目標の中でいろいろなキーワードが多すぎて伝わりにくくなっている。岐阜市立図書館といえばというイメージがわいてくるようなキャッチコピーをつくって、そこから図書館の目標を整理していくといい。</li></ul>

- ・「本がつなぐひと・まち」の事業でボランティアをどんどん増やしていくよりも、そこからビジネスにうまくつなげていけるようにできるといい。
- ・分館や図書室では人のつながりをつくる意味でもボランティアの存在が重要になる。
- ・「おとなの夜学」を地域の図書室で行うと活性化につながる。
- ・高齢化が進む中で中央館から離れた地域でも質の高い文化に触れられる環境は重要。
- ・中高生がこの場所で生まれ育った意味に触れられる場所がサードプレイスになるといい。

### 3 第2次岐阜市子どもの読書活動推進計画令和元年度までの成果

- ・子どもの読書量は学力に影響するので、本を読む環境に不公平が生まれないようにしなければならない。そのためには地域の図書室の活用が重要。
- ・分館や各図書室をプロデュースできる人材を中央館で育ててほしい。
- ・中央図書館から離れるほど学校図書館の役割が大きくなるが、どうしても学校の規模に応じた図書館になってしまう。中央図書館から離れた学校こそ支援が必要。
- ・中学校に公共図書館を置くという例もあるので将来的にもそういうことも必要ではないか。町の活性化にもつながる。他都市で中学校の図書館を地域に開放している例では一般市民と中学生が一緒に図書館を利用していても、嫌な顔をする生徒は意外と少ない。
- ・住んでいる地域や親の意識の違いが子どもの読書環境の格差につながってはならない。学校図書館や分館の充実だけでなく地域と中央図書館を結ぶ交通ネットワークも必要。
- ・小さい図書館ほど子どもや親を感動させられる選書の力が必要。
- ・図書館の蔵書を見ていると選書に疑問を感じることもある。